

SCT-Bの反応パターンとMMPIとの関係について

小林 哲 郎

1 はじめに

SCT-Bは精研式文章完成法の刺激語（家庭、身体、社会の3領域との関係を考慮して選んだ25項目）を呈示して文章を書かせた後に、「が」という接続詞を用いて全体が1つの文章になる様に、もう1つ文章を書かせる課題である。SCT-Bは施行時間の問題上刺激語の数は制限されるが、「が」の前後での反応の変化にその個人のパーソナリティが反映される。

筆者は、このテストをいくつかの大学等で施行し、「が」の前後の変化にいくつかのパターンがあることを見出した。その反応パターンには以下のようなものがある。

1) 肯定・否定

前半で肯定（否定）的感情を述べ、後半で否定（肯定）的感情を述べるパターン。

2) 肯定・肯定

前半でも後半でも肯定的感情を述べるパターン。

3) 否定・否定

前半でも後半でも否定的感情を述べるパターン。

4) 例外

前半で肯定（否定）しておいて、例外的な否定（肯定）面を述べるパターン。このパターンにはいくつかのバリエーションがある。たとえば前半で肯定（否定）した事物や事象について部分的に否定（肯定）することもあるし、限定された状態になると問題が生じるというような表現もこのパターンである。

5) 受容

前半では否定的感情を述べるが、後半でそれを受容するパターン。

6) 拒絶

前半では受容したものの後半で否定的感情を述べるパターン。

7) 理想・現実

前半で理想、願望、原則などを述べ、後半では実際の状況、現実的問題などを述べるパターン。

8) 期待・不安

前半で期待、希望を述べ、後半ではそのことについての不安を述べるパターン。

9) 過去・現在

前半、後半で過去と現在の違いについて述べているもの。ただし英文法でいうような大過去と過去の関係の中で違いに言及しているものもこのパターンに入れる。

10) 希望

前半で述べた内容に関して後半で希望、願望を述べるパターン。

11) 不安

前半で述べた内容に関して後半で不安を表明するパターン。

12) 決意

前半で述べた内容に関して後半で決意や努力を表明したり原則、理想を述べるパターン。

13) 自己

前半で述べた内容に関して後半で自分に関係づける。

14) 説明

前半で述べた内容に関して後半で説明したり気持ちを述べたりするパターン。

15) その他

同じ文章の繰り返しや刺激語に手を加えたりしたもの

後半に反応がないものと疑問反応（意味の分からないもの、「が」を格助詞として使っているもの）を除いて、以上のどれかに評定する。

表一 1 SCT-Bの反応パターンとMMPIの相関

	肯定否定	肯定肯定	否定否定	例外	受容	拒絶	理想現実	期待不安	過去現在	希望	不安	決意	自己	説明	その他
Q	-0.058	0.061	0.024	0.036	0.110	-0.052	0.159	0.044	0.166	0.167	-0.050	-0.175	0.012	-0.053	-0.059
L	-0.090	0.278**	0.121	-0.131	-0.058	-0.004	-0.006	0.160	-0.047	0.046	0.265**	0.086	-0.045	-0.048	0.157
F	-0.018	-0.041	0.146	-0.105	0.160	0.132	-0.088	0.025	-0.069	-0.041	-0.095	0.023	0.179	-0.002	0.027
K	-0.066	0.051	-0.039	0.010	-0.171	-0.174	0.019	-0.084	-0.057	0.134	0.171	0.157	-0.056	0.016	0.036
HS	0.039	-0.007	0.056	-0.046	0.164	0.075	-0.149	0.132	-0.058	0.121	-0.068	0.063	0.145	-0.111	-0.021
D	-0.187*	0.139	0.081	-0.178	0.066	-0.066	0.001	0.025	0.028	0.164	-0.031	0.175	0.088	-0.038	0.038
HY	0.087	0.103	-0.000	0.003	0.158	0.019	-0.082	0.094	-0.191*	0.102	-0.099	0.126	0.088	-0.171	-0.099
PD	-0.070	0.035	-0.035	-0.060	0.037	-0.055	0.050	-0.074	-0.156	0.104	-0.015	0.061	0.068	-0.084	-0.059
MF	0.185*	0.046	0.061	0.057	0.019	-0.088	-0.215*	0.133	0.007	0.033	-0.061	0.131	-0.044	-0.081	-0.008
PA	-0.103	0.024	0.064	0.048	-0.128	0.115	0.056	-0.028	-0.097	0.077	-0.087	-0.044	0.214*	-0.011	0.013
PT	0.022	0.004	0.127	-0.033	0.004	-0.007	-0.125	0.008	-0.072	0.088	-0.043	0.212*	0.210*	-0.108	-0.055
SC	0.024	-0.026	0.138	0.008	0.043	0.111	-0.072	-0.045	-0.090	0.034	-0.042	0.065	0.123	-0.065	-0.083
MA	0.043	0.020	-0.034	0.184*	0.109	0.143	-0.055	0.148	-0.148	-0.195*	-0.064	-0.037	-0.069	0.015	0.007
SI	-0.007	-0.029	0.156	-0.158	0.048	0.068	-0.004	-0.084	0.105	0.038	-0.046	0.084	0.057	-0.051	0.003

+P<.10 *P<.05 **P<.01

表-2 SCT-Bの反応パターンとMMPIの相関(男子)

	肯定否定	肯定肯定	否定否定	例外	受容	拒絶	理想現実	期待不安	過去現在	希望	不安	決意	自己	説明	その他
Q	-0.014	0.258 ⁺	0.007	-0.035	0.028	-0.160	0.254 ⁺	0.012	0.105	-0.226 ⁺	0.028	-0.120	-0.045	-0.086	-0.074
L	-0.223 ⁺	0.119	0.032	0.036	0.053	0.086	0.020	0.437 ^{**}	-0.104	-0.134	0.243 ⁺	0.107	-0.087	-0.040	0.229 ⁺
F	0.061	-0.123	0.342 ^{**}	0.005	0.148	0.140	-0.161	-0.018	-0.071	-0.080	-0.081	-0.060	0.250 ⁺	-0.014	0.025
K	-0.118	0.176	-0.106	0.035	-0.197	-0.175	-0.056	0.028	-0.024	0.291 [*]	0.095	0.253 ⁺	-0.081	-0.001	0.042
HS	0.145	-0.014	0.216	-0.114	0.125	-0.028	-0.293 [*]	0.082	-0.107	0.110 [*]	0.045	0.070	0.134	0.019	-0.016
D	-0.153	-0.062	0.021	-0.295 [*]	0.061	-0.008	-0.081	-0.115	0.063	0.265 [*]	-0.037	0.201	0.102	0.067	0.070
HY	0.149	0.034	-0.020	-0.041	0.138	-0.050	-0.184	0.057	-0.231 ⁺	0.089	0.050	0.139	0.109	-0.078	-0.130
PD	0.181	0.033	-0.150	-0.121	-0.014	-0.060	-0.055	-0.117	-0.141	0.261	0.006	0.114	0.149	-0.116	-0.090
MF	0.103	0.052	-0.052	-0.046	0.087	-0.079	-0.031	0.209	-0.178	-0.021	0.040	0.115	0.013	-0.134	0.101
PA	-0.054	0.017	0.103	0.104	-0.203	0.082	0.029	-0.182	-0.112	0.110	-0.026	-0.122	0.235 ⁺	0.011	0.010
PT	0.110	-0.043	0.136	-0.052	-0.001	-0.016	-0.283 [*]	-0.162	-0.039	0.140	-0.108	0.208	0.226 ⁺	0.044	-0.049
SC	0.076	-0.077	0.332 ^{**}	0.097	-0.024	0.077	-0.200	-0.041	-0.114	0.089	-0.055	-0.017	0.150	0.025	-0.110
MA	0.202	0.060	0.213	0.221 ⁺	0.113	0.122	-0.040	0.246 ⁺	-0.276 [*]	-0.384 ^{**}	-0.009	-0.087	-0.111	-0.018	0.002
SI	-0.025	-0.133	0.141	-0.346 ^{**}	0.044	0.058	0.043	-0.141	0.132	0.120	-0.035	0.119	0.191	-0.086	0.029

+ P<.10 * P<.05 ** P<.01

表-3 SCT-Bの反応パターンとMMPIの相関(女子)

	肯定否定	肯定肯定	否定否定	例外	受容	拒絶	理想現実	期待不安	過去現在	希望	不安	決意	自己	説明	その他
Q	-0.145	-0.121	-0.001	0.056	0.227 ⁺	0.039	0.138	0.049	0.218	-0.123	-0.109	-0.241 ⁺	0.055	0.002	0.000
L	0.014	0.447 ^{**}	0.174	-0.299 ^{**}	-0.175	-0.087	-0.012	-0.111	0.013	0.237 ⁺	0.292 [*]	0.059	-0.005	-0.042	0.000
F	-0.085	0.077	0.009	-0.212	0.161	0.122	-0.020	0.091	-0.049	0.010	-0.120	0.128	0.091	-0.007	0.000
K	0.007	-0.080	0.027	0.006	-0.160	-0.178	0.082	-0.182	-0.089	-0.032	0.245 ⁺	0.093	-0.026	0.019	0.000
HS	-0.088	-0.009	-0.068	-0.026	0.236 ⁺	0.164	0.034	0.158	-0.032	0.132	-0.157	0.039	0.152	-0.195	0.000
D	-0.299 ^{**}	0.371 ^{**}	0.098	-0.117	0.113	-0.120	0.188	0.149	-0.058	0.048	-0.018	0.130	0.065	-0.116	0.000
HY	0.011	0.181	0.005	0.010	0.195	0.093	0.066	0.129	-0.145	0.117	-0.261 [*]	0.111	0.062	-0.266 [*]	0.000
PD	-0.016	0.044	0.077	0.016	0.083	-0.056	0.155	-0.019	-0.164	-0.075	-0.043	0.031	-0.022	-0.071	0.000
MF	0.027	0.001	-0.113	-0.087	0.225 ⁺	-0.112	-0.207	-0.021	0.088	-0.121	-0.193	0.053	-0.230 ⁺	0.187	0.000
PA	-0.159	0.037	0.051	-0.001	-0.022	0.162	0.079	0.184	-0.059	0.030	-0.178	0.053	0.192	-0.055	0.000
PT	-0.165	0.047	0.069	-0.078	0.068	0.017	0.189	0.155	-0.176	0.026	0.040	0.190	0.190	-0.230 ⁺	0.000
SC	-0.045	0.030	-0.012	-0.068	0.137	0.148	0.110	-0.055	-0.066	-0.029	-0.026	0.134	0.091	-0.153	0.000
MA	-0.085	-0.017	-0.196	0.175	0.091	0.160	-0.110	0.068	0.030	0.004	-0.122	0.016	-0.021	0.032	0.000
SI	-0.067	0.071	0.122	-0.052	0.104	0.094	0.032	-0.064	0.031	-0.054	-0.048	0.022	-0.099	0.031	0.000

+ P<.10 * P<.05 ** P<.01

この反応パターンの評定に関しては、小林哲郎(1985、1986、1985〈学会発表〉)に詳しく解説した。

この反応パターンについては、人格の二面性スケール⁽¹⁾との関連についての検討は行われ「肯定・否定」と二面性スケールの肯定的形容詞対の二面性スコアに相関があることなどが分かった(小林哲郎・森知子1984日本心理学会第48回大会発表論文集605)⁽²⁾が、パーソナリティとの関連については、十分な検討が必要である。そこで、本年度はMMPIと反応パターンとの相関(日本教育心理学会第28回総会発表論文集392-393)⁽³⁾とY-Gと反応パターンとの相関(日本心理学会第50回大会発表論文集589)について学会で発表した。

本論文では、このMMPIと反応パターンの関係について、より詳細な分析を行い、反応パターンの性質を検討するが、具体的には、男女別の相関とMMPI 2点コードによる分析を行う。

2 MMP I と SCT-B 反応パターンの男女別の相関

本年度の上記の学会発表では両者の相関は表1のようになり、以下の結果が得られた(MMPIの得点は粗点である)。

*「肯定・否定」がMf尺度と正相関、D尺度と負相関

*「肯定・肯定」がL尺度と正相関

*「例外」がMa尺度と正相関

*「理想・現実」がMf尺度と負相関

*「過去・現在」がHy尺度と負相関

*「希望」がMa尺度と負相関

*「不安」がL尺度と正相関

*「決意」がPt尺度と正相関

*「自己」がPa尺度、Pt尺度と正相関

この結果の中で「肯定・否定」と「理想・現実」がMf尺度と相関があるが、MMPIではMf尺度の評点や解釈が男女で違ってくる。この結果は男女ほぼ同数のデータ(男60・女55)を用いているが、男女別のデータで相関をとるとどうなるであろうか。ここでは、MMPIとの関連

から男女別の反応パターンの性質を検討することにする。

そこで、まず、表1と同じデータを男女に分け、MMPIと反応パターンの相関をそれぞれで計算した(表2、表3:ピアソンの相関係数)。

この結果から考えられることを反応パターン毎に検討してみる。

*肯定・否定

このパターンの特徴は全体ではMfと相関がある(即ち、男女共、興味が女性的である)のに、男女別にすると、どちらにも相関が無くなるということである。ということは、肯定・否定とMfとの相関は、一般的傾向としてはいえるが、その関係はまだ検討する余地がありそうである。Dとの関係は女子で負相関があるので、抑うつ的でなく情緒の安定した女子にこのパターンが出易いといえるだろう。

*肯定・肯定

このパターンは女子のL、Dとの相関が1%レベルであるので、それが全体の相関に影響しているようである。即ち、好ましい印象を与えようとする態度や過度に抑圧を用いること、抑うつ、自信欠如、内気等の特性を持つ女子にこのパターンが出やすいのではないだろうか。彼女らの自信がないのに良く見せようとする努力や嫌な面を抑圧しようとする努力が、一度肯定したものを「が」に続けてもう一度肯定するという形に表されているものと思われる。

*否定・否定

このパターンは男子にだけSc:Fとの相関がある。Scとの相関から、内気で、仲間から孤立していて、敵意を感じてもそれを表現できずに引き籠もってしまうような男子がこのパターンを出し易いことが考えられる。彼らがいつもは表現できない敵意や攻撃性が、このテストでは表現されたのであろう。

*例外

このパターンは全体ではMaと正相関、Dと負の傾向がある。しかし、男女別でみると、男子ではD、Siと負相関、Maと正の傾向があるのに対して女子ではLと負相関がある。このことから、陽気で社交的だが衝動的な面のある男子

と自信があり洞察力のある女子がこのパターンを多用するようである。いずれにせよ、このパターンはある程度適応的なパーソナリティの指標と考えられる。

*理想・現実

このパターンも全体ではMfと相関があるのに、男女別ではどちらにも相関がない。ただし、男子ではHs、Ptと負相関がある。従って、このパターンを多く用いる男子は、強い不安を持たず、楽天的で、責任感があり、よく適応しているものと思われる。彼らは、例外を多用する男子よりは、衝動の統制がうまく行われているものと思われる。

*期待・不安

このパターンは、男子ではLと相関がある。このパターンは「将来」、「仕事」という項目でよく出現するものであり、これらの項目で前半で「—になる」とか「—したい」と断定的に述べて後半で不安になるというものが多い。男子ではこのようなパターンになるものは、自分をよく見せようとする傾向があるものと思われる。

*過去・現在

このパターンは全体ではPdと負の傾向、Hyと負の相関があり、社会活動に参加せず、興味の範囲が狭く、しきたりを重んじるような人と関係している。しかし、男子ではMaと負相関があり、活動水準が低く、引っ込み思案で、感情を過剰に統制するような男子がこのパターンを多用するようである。彼らは、一見物静かだが頼りがいのある人物とみられることが多い。しかし、その実、抑うつ、不安、緊張が強いのである。

*希望

このパターンは全体ではDと正の傾向、Maと負相関があり、抑うつ傾向が示唆される。これを男女別でみると、男子ではK、D、Ptと正相関、Maと負相関があるのに対して女子ではLと正の傾向があるだけである。従って、男子で、抑うつ、強迫的な人が、後半部で「—が欲しい」、「—であったらいいのに」というような希望のパターンを用いるものと思われる。

女子では相関が出ないのは、女子では希望を述べるのが社会的に許容されているので、特別にパーソナリティとの関連がないものと思われる。

*不安

このパターンは全体でLと正相関がある。女子でも相関が、男子でも傾向があり、このパターンとLとの関係は性別を越えて存在するようである。しかし、女子ではHyと負相関がある。このことは、このパターンとLとの関連は抑圧とか良く見せたいということとともに、低いHyと関連する因習的、同調的、道徳主義的な人であると考えたほうがいいのかも知れない。

*決意

このパターンは全体でPtとの正相関、Dとの正の傾向があるが、男女別では、相関は男子でKとあるだけである。従って、一般的には強迫的、抑うつ、神経過敏であるといえるが、確定的なことはいえない。

*自己

このパターンは全体ではPa、Ptと相関があり、男子ではこれらの尺度と正の傾向がある。従って、このパターンを多用する人は、一般的に、妄想的傾向があり神経過敏で強迫的であるために、自己との関係づけが強く、このパターンが多く用いられるものと思われる。そして、この傾向は女子よりも男子に多くみられるようである。

このようにしてみると、全体の相関と男女別の相関では似ているものもあるし、男女で全然違うもの、微妙に違うものと様々であることが分かる。例えば、「が」があるのに肯定を繰り返すことは女子のL、Dと関係するとか、否定を繰り返すことは男子のSc、Fと関係するというような結果は興味深いものといえよう。また、「希望」を多用するのは、女子では関係ないのに男子では抑うつ、強迫などと関係してくるといっても社会的な性役割との関連で考えることができる。これらの結果から、今後反応パターンから被検者のパーソナリティを考える際には、一般的なことと男女別で言えることと両方を考慮した方がよさそうである。

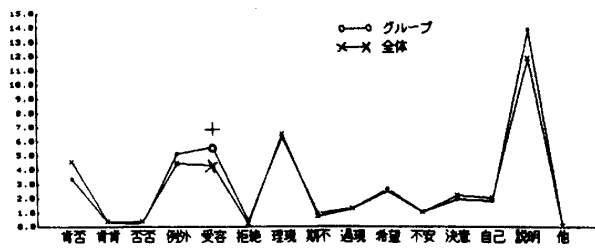


図-1 1-3コード

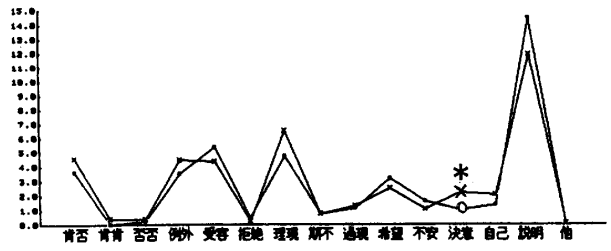


図-2 1-8コード

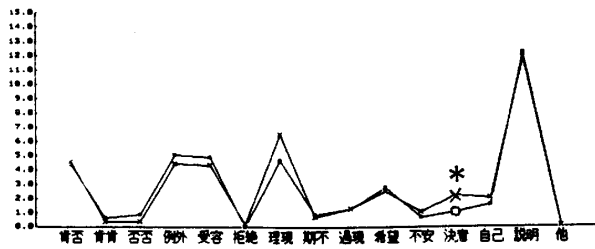


図-3 1-9コード

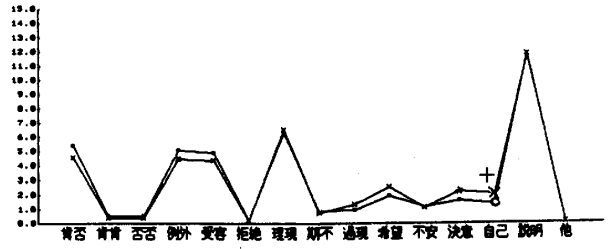


図-4 4-9コード

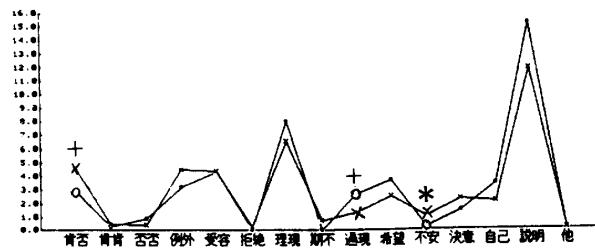


図-5 6-8コード

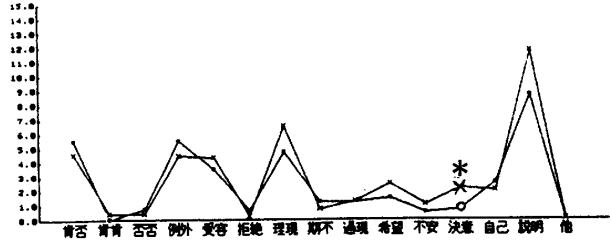


図-6 6-9コード

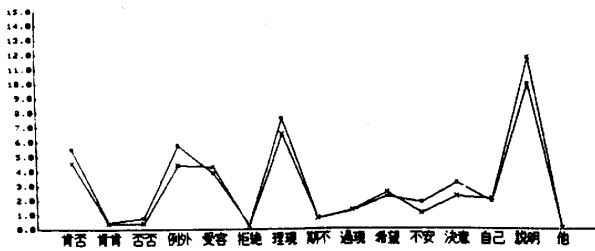


図-7 7-8コード

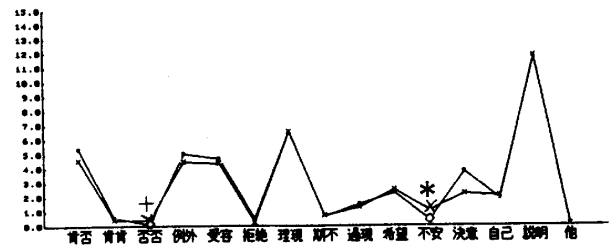


図-8 8-9コード

+P<.10

*P<.05

3 MMPI 2点コードによる検討

MMPIを解釈する際に、上位2尺度を取り出して2点コードとする方法があり、それぞれのコードを持つ人の検査外行動の特徴を見いだそうとする研究が数多くなされている。コードへの分類に関しては、Graham (1977) は、かつてはコードへの分類には複雑な規則を設けることもされたが、現在では単純に上位2尺度を用いるアプローチへの関心が復活してきたし、この方法でも検査外行動を記述する際の正確さの点では大きな損失はないとしている。

そこで、ここでは被検者を2点コードで分類し、あるコードのグループの人が他の人と反応パターンに於て違いがあるかどうかというものを検討してみたい。

方法としては、まずSCT-BとMMPIの両方のデータのそろった金沢大学教養部の学生210名（男125、女85）について、MMPIの結果から各被検者の2点コードで分類した。その結果は表4のようになった。このなかで、1グループ7人以上いて、Grahamが解説をしているコードをここでの検討の対象とした。以上の基準から選ばれたコードは、1-3、1-8、1-9、4-9、6-8、6-9、7-8、8-9であった。そして、各コードの被検者の各反応パターンにおける平均値と全員の各パターンの平均値の差の有意性をt検定で検討するという方法をとった。

結果をグラフで表示すると図1から図8のようになる。

表-4 2点コードの分布

コード	人数	コード	人数	コード	人数
1-2	3	2-0	7	5-6	2
1-3	21	3-4	5	5-7	2
1-4	4	3-5	7	5-8	1
1-5	3	3-6	2	5-9	5
1-6	4	3-7	1	5-0	4
1-7	1	3-8	4	6-7	4
1-8	8	3-9	10	6-8	7
1-9	9	3-0	2	6-9	8
2-3	5	4-5	3	7-8	11
2-4	2	4-6	4	7-9	6
2-5	3	4-7	1	7-0	3
2-6	1	4-8	3	8-9	14
2-7	5	4-9	14	8-0	2
2-8	1	4-0	1	9-0	4

各コード毎にGrahamの解説を基に検討してみる。

*1-3 (3-1) コード <Hs-Hy>

このコードの人はDが低ければ転換V型といわれ、古典的な転換症状を示すことがあるといわれている。このコードの人は未熟で自己中心的である。自分に欠点がないと思っており、否認、投影、合理化の機制を過度に用いる。また、ストレスに会うこと二次利得のはっきりした身体的訴えをしたり、摂食障害を示すこともある。

しかし、このコードと反応パターンの関連は受容でこのコードの人が多少高い程度でたいした関連はみられない。

*1-8 (8-1) コード <Hs-Sc>

このコードの人は、あまたの敵意感情と攻撃感情を抱いているのに、それらを適切に表出できずに完全に抑えている。そのために、「封じ込められた」といった感情を持つか、けんか腰になったり、苛立ってくる。また、社会的不全感を持っており、孤立感や疎外感を抱くことが多い。精神科患者では、たいてい精神分裂病と診断される。

反応パターンでは、このコードの人は「決意」が少なくなっている。このパターンは、後半部で、自分で努力してなんとかしようとか、これはこうあるべきだというような原則、理想を述べるものであり、現象的には感情が平板なこのコードの人にはこのパターンは出にくいかも知れない。

*1-9 (9-1) コード <Hs-Ma>

このコードの人は、ひどく不安になって緊張し、落ち着かなくなる傾向がある。胃腸障害、頭痛等の身体的訴えがよくみられる。表面上は、社会的外向、攻撃的に見えるが、本質的には受動、依存的な人であって、自分のこうした性格を打ち消そうとしているのである。また、目標は明確に出来ないのに、高度な達成水準を求め、欲求不満に陥る。

このコードの人も、反応パターンでは「決意」が少ない。要求水準は高いが、自分で努力しようという目標が明確でないこととか、本質

的な受動性が関係しているためではないかと思われる。

＊4—9（9—4）コード〈Pd-Ma〉

このコードの人の特徴は、社会の基準や価値観を全く無視している点である。利己的でわがままであり、衝動的である。そのために、様々な非行行動をとる。

このコードでは反応パターンでの有意な差はみられないが、「自己」が少ない傾向がある。これは、このコードの人の内省のひくさを示唆しているものと思われる。

＊6—8（8—6）コード〈Pa-Sc〉

このコードの人は強い劣等感と不安定感を持っている。他人との情緒的関わりを避け、他人を信用せず、一人でいることを好む。一般的にいえば、分裂病質の特徴を持つ。精神科患者では、分裂病妄想型と診断されることが多い。

このコードの人は、反応パターンでは「不安」が少ない。また、「肯定・否定」が少なく、「過去・現在」が多い傾向がある。「不安」が少ないのは、不安を意識化できない分裂病者の自我の弱さと関係しているためであろう。また、情緒的安定と関係する「肯定・否定」は少なく、過去へのこだわりから、「過去・現在」が多い傾向が出たものと思われる。

＊6—9（9—6）コード〈Pa-Ma〉

このコードの人は依存的であり、愛情を求める欲求が強い。現実あるいは想像上の脅威に弱く、絶えず不安と緊張を感じている。強いストレスがかかると空想に引き籠る。また、状況にふさわしい形で情緒を表出できないために、統制過剰になってしまうか、情緒がそのまま爆発するかのどちらかの形を取る。精神科患者ではほとんど分裂病妄想型の診断がつけられる。

このコードの人も1—8、1—9コードの人と同じ様に反応パターンでは「決意」が少ない。このコードでは、空想に引き籠もる様な現実からの逃避が「決意」の低さと関係しているのではないだろうか。

＊7—8（8—7）コード〈Pt-Sc〉

このコードの人はひどく混乱していて、心理的に問題のあることをためらわずに認める。抑

うつ感、心労、緊張感、神経質になっていることを訴える。交際の経験も少なく自信がないため社会的な交わりから退いてしまう。

このコードの人は反応パターンでは差がないので何もいえない。

＊8—9（9—8）コード〈Sc-Ma〉

このコードの人は利己的で、他人に期待するという点では幼児的である。注目されないと憤慨し、敵意を持つ。活動過剰であり、情緒的には不安定である。自己評価は現実離れしており、他人からは仰々しい、高慢、気まぐれと思われる。このコードの人に多い診断は分裂病である。

このコードの人は反応パターンでは「不安」が少なく、「否定・否定」が少ない傾向がある。不安を意識化できない分裂病者の自我の弱さのためと思われる。

このコード毎の反応パターンの違いは、コード内の人数も少ないし、被検者は大学生で概ね正常範囲の適応をしているものと思われるので、この結果だけから反応パターンと精神病理の関係は論じられないが、以上のような関連が示唆されるといえよう。

ところで、コード全体で考えると「決意」が少ないコード（1—8、1—9、6—9）と「不安」が少ないコード（6—8、8—9）が目につく。おおまかな傾向でしかないが、精神病尺度と呼ばれるPa,Sc,Maに関係するコードで「不安」が少なく、神経症尺度の一つであるHsがからむと「決意」が少なくなるようである。しかし、6—9（Pa-Ma）では「決意」が少ないので、より詳細な検討が必要であろう。

5 まとめ

MMPIと反応パターンの関係を全体、男女別の相関、そしてMMPI 2点コードから検討を加えたが、数多くの示唆的結果が得られた。

総合的に考察を加えると、「決意」は多用されると一般的にはPtとの相関があるので強迫的で不安が強いことを示すのに、少な過ぎると1—8、1—9、6—9コードに示されるようなパーソナリティと関係するようである。また、「不安」の多用はLと関係して抑圧と結び付く

のに少な過ぎると6-8、8-9の様な精神病尺度と関係してくる。このように多用されても使用が少なくても特別な特性と関連するという事はパーソナリティをダイナミックに捉えるというこのテストの目的に沿った結果として意義があるものと思われる。また、「不安」の多用は不安が生じないように嫌なことを抑圧しようとする神経症者の無意識レベルの投影であるし、使用が少な過ぎるのは不安を意識化できない精神病の病理と考えると、このテストから様々な精神病理を推測することへの可能性が考えられる。

今後は、実際の臨床データを収集し、SCT-Bの反応パターンの性質を検討し、より診断上妥当性、信頼性のある指標として行きたい。また、パーソナリティとの関係も他のテストとの関連を追求するという方向で、検討を続けて行きたいと考えている。

注

- 1 人格の二面性スケールはSD法を応用した形式のテストで、対になる反対語を単極性の尺度に分けて別々に自己像を評定させるものである。そして、その個人が自己の中の二面性を認知している程度を得点化するものである。このテストの形式については森知子(1983)を参照のこと。
- 2 この研究の時使用していた並列、転換のパターンとTスコアは現在は使用していない
- 3 学会発表(日本心理学会、日本教育心理学会とも)の論文集の論文ではデータの処理にこまかいミスがあったので発表時に訂正論文を配布した。表1は訂正した結果である。また、その後、MMPIの得点がTスコアに変換されてないことがわかり、Mfの解釈が変更された。(なお、訂正論文を希望する方は筆者に請求して下さい。)

参 考 文 献

- *Graham, J, R 1977, The MMPI: A Practical Guide, Oxford University Press, (田中富士夫訳1985MMPI—臨床解釈の実際—三京房)
- *岩原信九郎、新教育統計法(第38版)1980日本文化科学社
- *小林哲郎 1985 SCT-Bの評定について—評定者間の評定の一致率の検討—日本心理学会第49回大会発表論文集 240
- *小林哲郎 1985 SCT-Bの評定について 金沢美術工芸大学学報 第29号 35-44
- *小林哲郎 1986 SCT-Bの評定について—項目別の反応パターンの検討— 金沢美術工芸大学学報 第30号 39-45
- *小林哲郎 森知子 1984 SCT-Bと人格の二面性スケールについて 日本心理学会第48回大会発表論文集
- *森知子 1983 質問紙法による人格の二面性測定の試み 心理学研究 第54巻 183-188
- *日本MMP I研究会(編)1969 日本版MMPIハンドブック 三京房
- *佐野勝男・楨田仁 1961 精研式文章完成法テスト解説 金子書房